

■新しい時代の定置漁業

食文化を支える定置漁業

定置漁業の生産量は、平成11年には年間約52万トンあり、海面漁業の総生産量の約10%を占めています。食料生産における貢献度は高いとは言えませんが、「少量多品種生産」の代表的漁業であり、消費者に新鮮で豊かな食生活文化を提供する重要な役割も担っています。

定置漁業で漁獲される魚種は数百種にも及びますが、漁獲量の多いのはサケ・マス、イワシ、サバ、アジなどの4~5種で、全体の半分を占め残りは数百種で構成されている「少数寡占種、多数付随種」となっています。かつては、ブリが定置漁業の代表種でしたが、今では最盛期の1割にまで減少したので、他の多数の魚種を獲るために操業期間を伸ばしたり、漁具を改良して操業するようになりました。

進歩する定置漁業

よく、定置網は「百余年の歴史を有する伝統的漁法」と言われますが、操業では省力化や機械化が進み、近代的漁法に生まれ変わっています。漁場には、季節によって移り変わる魚に合わせて最新式の定置網が敷設され、クレーンやキャブスタンを装備した揚網船（網起し船）で数名の乗組員で網を揚げているのが一般的な姿です。

今後は更に進んで、操業 - 運搬 - 水揚げが一体になったシステムが当たり前になると思われます。その結果、次の若い世代に引き継がれて流通、販売をも視野に入れた新しい経営システムに発展していくことも示唆しています。

情報化と定置漁業

一部の定置網では、20年以上も前から陸上に居ながらにして魚の入網状態をモニターできる遠隔魚探が利用されています。更にメモリ式水温計、潮流計、水深計を取付け、網の形状（網成り）も見られるようになっています。

また、インターネットの普及によって定置漁業の関連情報も急速に広まっています。パソコンでインターネットを開くと定置網で漁獲した魚のネットオークション販売やホテル・旅館或いは観光地の売店では定置網で獲れた旬の魚を提供するPRページなど、地域・地先の魚が詳しく知られるようになってきました。このような「ネット社会」になって定置の漁業者も自ら「鮮度のよい定置もの」を消費者に提供する手段としてのインターネットを活用する必要があります。また、携帯電話の普及に併せて「いつでも、どこでも、誰でも」携帯電話から情報発信・受信ができるシステムを構築する必要があるでしょう（参考；今では、テレビ付き携帯電話で定置網の中の魚を確認しているところも出てきました）。

過疎化した漁村では、地域振興策の一つとして観光定置網や体験定置網などとして地域の活性化にも一役担うでしょう。

定置漁業はこのようにして、新たな発展を辿っています。（「新しい時代の定置網漁業を考える（三重県津地方県民局農林水産商工部 浜口勝則）」（「ていち」第100号から作成）